

周作人『木片集』訳稿 (二)

Zhou Zuoren's Mu Bian Ji: A Translation (2)

徐 小 淑*・山田 史生**

Xu Xiao shu*・Fumio YAMADA**

要旨

周作人 (一八八五～一九六七) 最晩年の小品文集『木片集』の翻訳。

冬至九九歌

夏至のあと、冬至のあと、それぞれ「九九」の風習がある。寒暑の変化を計算するのである。もともと、夏の九九はあまり意識されず、なんとなく日が過ぎてしまう。冬は寒くてたまらないので、どれくらい寒さがつづいたのかが気になり、指折り数える。北の地方でとくにそうである。

北京の九九歌が見つけれなかったので、ひとまず蘇州のものを例にあげる。『清嘉録』にこういうのが載っている。

- 一九二九、挨拶するときも手を出さない。
三九二十七、屋根のうえを吹く風の音は筆築のよう。
四九三十六、夜は蒲団で寝ていても野宿のよう。
五九四十五、貧乏人は街頭で踊って身体を温める。踊らない踊らない、まだ春まで四十五日もある。
六九五十四、ハエが部屋のなかに逃げこむ。
七九六十三、マフラーを両肩にかける。
八九七十二、猫や犬が墓地で寝転がる。
九九八十一、貧乏人の試練が終わる。足を伸ばして寝ようとしたら、蚊やノミが出てきた。

ちょっとだけ説明しておこう。「挨拶 (相喚) するときも手を出さない」の「相喚」はわかりにくかるう。声をかけあうときに手招きせねばならんわけではない。じつは「相喚」は古語で、現在ではもう通じない。『清嘉録』に書かれていることにかんがみて、もともと呉語だったことがわかる。寧波や紹興では最近まで使っていたはずだが、ここ四十年くらいのあいだに消えたとおもう。「相喚」の意味は、胸のまえに組

んだ両手を上下させる礼 (作揖) である。小説のなかで「唱喏」と称されるのは、往時はひとに逢ったときに口でなにか一言いったり、あるいは声をかけたりしながら、手を上下させる礼をするからである。古いことを好むひとは「相歓」と書くが、ここまでは必要はない。『老学庵筆記』によれば、最初のころの「唱喏」は声をかけながらやったが、のちに黙ってやるようになったので「啞喏」と称するらしい。小説のなかで「唱肥喏」という書き方もされるのは、たぶん両腕を胸のまえで丸く組む丁寧な拱手の礼のことだろう。

「八九七十二、猫や犬が墓地 (陰地) で寝転がる」の「陰」は当て字で、第一声ではなく第四声に読まねばならない。この字はもともと三水偏に「匄」の「匄」の字をつけたもので、第四声の「印」の音で読む。『世説新語』排調に「淘」の字が見える。王導が碁盤を腹にあてて「何ぞ乃ち淘なる」といったが、これは呉語で、「冷たいが寒くはない」という意味である。夏の暑い盛り、漆で塗られた碁盤を腹にあてるといのは、よくその感覚をあらわしている。

蘇州の九九歌はよその土地のものよりも好ましい。なんといっても貧乏人の気持ちを代弁しているから。よその土地では「九九八十一、鋤や鍬が一斉に出る」と歌うが、もっぱら農家のことをあらわすだけである。そこへゆくと蘇州では「貧乏人の試練が終わる。足を伸ばして寝ようとしたら、蚊やノミが出てきた」と歌う。五九の「踊らない踊らない、まだ春まで四十五日もある」もそうだが、貧乏人の苦しみをあらわしている。文人の手直しがはいっているにせよ、貧乏人に対する同情をあらわしており、昔ながらの庶民の暮らしぶりを色濃くとどめている。

* 山西大同大学外国語学部日本語講座
** 弘前大学教育学部国語教育講座

〔編集者談〕以下は香港の『新晚報』に載ったもので、頭の段落は同じなので省略する。

つぎは紹興の歌である。これは範寅の『越諺』から抜粋したものである。

一九二九、挨拶するときも手を出さない。(原注、浙江のひと(越人)は挨拶(揖)のことを相喚という。手を出さないのは寒いから)

三九二七、屋根のうえを吹く風の音は筆簾のよう。

四九三六、夜は蒲団で寝ていても野宿のよう。

五九四五、ベッドの端でウンウン(赤ちゃんにオシッコさせる。(かならずベッドのカーテンを出て、両足を持ち、ウンウンとあやしながらさせるが、この時期は厳寒なのでベッドの端でさせる)

六九五十四、屋根のうえに柔らかい萌芽(春がきて草木が芽吹く)

七九六三、破れ蒲団を天秤棒にかける(水飴売りが簾を吹いて春を告げ、古い蒲団と水飴とを換える)

八九七十二、黄色い犬が墓地で寝転がる。

九九八一、鋤・熊手が一齐に出る。

十九満九十、カエルがしきりに鳴く。

江蘇と浙江とは現在ではちがう省だが、風俗や言語はよく似ている。「相喚」はその一例である。範氏は「相喚」は「作揖」であると注している。おたがい声をかけるとき手を振らねばならないのか？ この「相喚」は古語の名残で、意味は挨拶(唱喏)のことである。亡き友の馬幼漁の話によると、寧波はいまでもこういうらしい。客が訪ねてくると、子どもたちは挨拶(唱喏)しなさいといわれる。「喏」は「若」とも読む。「相喚」や「唱喏」という云い方は、われわれ世代まで、いまのひとは使わないだろう。年配のひとに逢うと、かならず鄭重に「〇〇おじいさん(某公公)」「△△おじいさん(某叔伯)」といいながらお辞儀(揖)をする。年配どうしもおたがいにお辞儀(揖)をするので「相喚」という。陸放翁の『老学庵筆記』巻二にはこんなふう書いてある。

先君によれば、かつては朝廷に参上するときには、拝礼してから舞うだけだったらしい。政和以降、挨拶(喏)もするようになった。だが紹興の半ば、わたしが朝廷に参上したときには、もう挨拶(喏)はしなくなっていた。淳熙の末、朝廷にもどって起居や閤門が皇帝を出迎えるのも挨拶(唱喏)というが、絶対に声

は出さない。

ここにいう唱喏は、ほとんど報告というのに近い。顧張思の『土風録』巻十にもこう書かれている。

「長揖」は「唱喏」ともいう。宋人が『虜庭事実』のなかで「揖」は声を出さないで「啞揖」というと記している。宋以前、揖はみな声を出しており、宋以後は出さないのだが、ただ「唱喏」という名はまだ残っている。

幼いころに観た田舎のご当地芝居(地方劇)は、二枚目の若い男(小生)が登場して、老け役の男(外)にお辞儀をしながら、声に出して「兄貴、ごきげんよう」という。老け役も「賢弟、ごきげんよう」という。想い起こすに、そういう挨拶(唱喏)のシーンがあった。現在、だれかと逢っても「揖」のようなお辞儀はしない。だが「こんにちは」の挨拶くらいはする。『土風録』に引かれた明の何孟東の『余冬序録』には「唱喏とは息を吸いこむ声であり、古人はおたがいに「揖」しあうとき、そういう声を出したのだろう」と書いている。かならず声を出したとはかぎらない。はい(唯)ええ(阿)のように相手の注意を引くだけだったかもしれない。

つぎに説明する必要があるのは、「七九六三」の一句である。「破れ蒲団を天秤棒にかける」はさほど難解でもないが、注はいささか奇妙だから、コメントを加えておく。『越諺』の著者によれば、春になると陽気も暖かくなるので、古い蒲団を引っぱり出し、リサイクルの行商に売るのである。紹興にはちょっと特殊な職業があって、飴と交換する担ぎ屋がいた。これは賤民(墮民)に特有の商売で、自家製の麦飴、いわゆる関東飴、すなわち紹興では墮民飴と呼ばれる飴と、あらゆる古ぼけた衣類とを交換する。この飴は、ふつうの子どもが食べる丸い飴とはちがうのだけれども、作者はこの飴の行商による連想から、ふつうの飴を売るものも簾を吹くと歌ったのである。ホントのことをいうと、じつは簾を吹くのではなく、でんでん太鼓のようなものを振るのである。

北京あたりの九九歌は、つぎのように簡単である。

一九二九、手が出ない。

三九四九、氷の上を歩く。

五九六九、川べりで柳を見る。

七九、川の氷がとけ、八九、雁がやってくる。

九九加一九、牛で地べたを耕す。

犀

北京動物園にサイがやってきた。珍客の到来とあって、来園者がすこぶる多い。

サイ、ゾウ、カバ、これらはみな皮の厚い動物で、古代生物の生き残りである。サイは見た目が奇っ怪で、一見に値する。ただし、生きているサイを見るときには要注意のことがある。サイはおしっこを速くまで飛ばせるので、気をつけないと引っかけられてしまう。

サイはカバとちがって中国の書物によく出てくる。ゾウといっしょくたにされて出てくる。サイの角、ゾウの牙、どちらも珍奇なものである。この点、カバは見劣りする。

わりと古い記録として、『左伝』（宣公二年）のなかの歌謡がある。宋が鄭を征伐したとき、華元という宋の将軍が捕虜になり、ほうほうの体で逃げ帰ってきた。かれが築城の工事現場を巡視にくと、築城の人夫たちはつぎのような歌をうたって皮肉った。

睥たる其の目	ギョロギョロの目玉
蟠たる其の腹	パンパンの腹
甲を棄てて復る	鎧を捨てて逃げ帰る
于思于思	ヒゲの立派な大将は
甲を棄てて復た来たる	鎧を捨ててやって来た

華元はこれを聞くと、陪乗している副官にこう答えさせた。

牛には則ち皮有り	牛さえいれば皮はある
犀兕も尚お多し	ほかにも犀や野牛もおる
甲を棄つるも則ち那かあらん	鎧を捨ててもへっちゃらさ

築城の人夫たちは、こう返した。

彼其れ皮有りと	たとえ皮があったとて
丹漆を若何せん	絵の具や漆はどうしましょ

歌の滑稽さはさておくとして、わたしが重要だともうのは、昔のひとはサイの皮で鎧をつくったということである。弓矢の時代には、これで用が足りた。しかしサイの皮で防弾できるというのはウソである。ある英国の兵士がインドのデリーで試してみたところ、

ライフル銃でサイを撃てたら、サイはあっさり倒れたらしい。かれはビックリしたが、もっとビックリさせられたのは、この兵士の部隊が千ポンドの賠償金を請求されたということであった。というわけで、サイの皮で鎧をつくることは火薬が使われるようになって終わりを告げたのである。

サイが世に珍重されるもうひとつの理由は、『抱朴子』にいうように、サイの角が解毒の薬になるからである。かなり以前のことはあるが、サイの角は一本で百ポンドもした。一九二九年の記録によると、中国にサイの角を供給するために、一年で千余頭ものサイが捕殺されたという。この種の迷信はアラビアの部族にもあって、サイの角でつくった杯で飲めば、たとえ酒に毒を入れられても大丈夫だと信じられていた。中国に現存する杯の多くがサイの角でできているのは、そのあたりに理由がある。いまでは信じられていないけれども、この迷信がなくなれば、ずいぶん多くのサイを保護できる。サイはめっきり減ってきているので、こんな迷信はなくなったほうがよい。もっとも、ほんとうに薬になるかどうかという問題については、その薬の特殊性質について無知であるので、ひとまず意見を保留しておきたい。

ゾウはまえから動物園にいっぱいいるし、このたびはサイもやってきた。あとはカバだけだが、いつかやってきて動物園をにぎわせてくれることを期待している。

コウモリとフクロウ

—

生まれついた見た目のわるさのせいで、ひとに嫌悪され、しばしば理不尽に危害をくわえられる生きものがいる。その本性はすこぶる善良で、おまけに人間の役に立つというのである。そういう生きものの代表がコウモリ（蝙蝠）である。

昔々の中国では、コウモリは幸運に恵まれていた。最近ではすっかり悪運へと転落してしまっている。コウモリは名前の「蝠」が「福」と発音が同じなので、かつては吉祥の象徴とされていた。絵画にコウモリが五羽描かれるのは「五福」という意味である。こういうことは亀と鶴とをのぞけば、めったに得られない光栄である。ところが『イソップ寓話』が中国にはいつてきて以降、コウモリの名誉は地に墮ちた。西洋の伝説によれば、鳥類と獣類とが戦ったさい、コウモリは毛があるので鳥ではなく、飛べないので獣でもない

いう事情によって、どっちの陣営にも参加できず、いきおい典型的な日和見（騎牆派）と見なされることになってしまった。コウモリの見た目をあげつらえば、この言い伝えは当たってはいなくもない。しかし事実にかんがみれば、ひどく杜撰な譬喩でしかない。たしかにコウモリの見た目はわるいけれども、そこまで名誉を毀損されねばならん謂われはない。同じイソップのなかに「セミとアリ」という寓話がある。そこではセミは怠けものの代名詞だが、中国の詩においてセミは「高潔」の見本として歌われる。事実の片面だけによって、ものごとを決めつけてはいけない。

コウモリには「仙鼠」という異名がある。俗説によれば、ネズミは油（一説には塩）を盗み食いしたせいでコウモリに変身したらしい。そういう事情もあってか、最近になって不慮の災厄をこうむるハメになった。すなわち（蠅・蚊・鼠・雀という）退治すべき四種の生きもの（四害）の一味にくわえられた。コウモリは変身したネズミと見なされ、見つけられたら打たれる。子どもたちは遊びでコウモリを打つのが、もともと好きだ。夕暮れになってコウモリがあらわれ、あちこち飛びまわって虫を食べているとき、柔らかい枝をピュンピュンと鳴らしながら空中で振りまわす。翼がちょっとでもその枝に当たると、コウモリは傷ついて落ちてくる。

コウモリはべつにネズミの仲間ではない。ネズミから変化したものでもない。それどころか、四害を退治しようと呼びかけている現在こそ、むしろコウモリを保護すべきである。というのも、コウモリは益獣であって、さまざまな虫を食うからである。コウモリは口を開けて飛びまわり、どれくらいの蚊や蠅を食うのかはハッキリしないけど、かなり大量の虫を食う。北京や上海のような蚊や蠅のいない都市ではあまり役に立たないが、ちがう土地では役に立つ。保護すべきだといっても、なにも面倒なことはしなくてよい。ツバメと同じように、好きなように飛ばせておけばよいだけである。

二

ひとに誤解されがちで、別の生きものがある。その状況はコウモリよりも深刻である。それはフクロウ（猫頭鷹）である。

誤解の原因の第一は、見た目がみにくく、鳴き声がかたないため、ひとに嫌悪感をもよおさせるのである。フクロウは夜行性であって、目が特別な構造をしている。目玉が大きい。頭も大きい。だから「猫の

頭」というのである。ワシやタカの顔もよろしくないが、猫の顔をした鳥ほどみにくくはない。その鳴き声はさまざまだが、どれもこれも感じがわるい。たとえば「掘汪掘汪」のように聞こえる鳴き声もあって、田舎の人はこれを「穴を掘る」というふうに聴き、土葬することを連想する。そして不吉なことの前兆とみなすのである。もっとも、これはただの迷信にすぎない。いったん打破されれば、迷信はなくなる。

原因の第二は、昔からの伝説である。フクロウは親不孝の鳥で、大きくなったら母親を食うというのである。ある学者などは「刎ねた首を大衆に晒す（梟首示衆）」という言葉は「梟」という字の本義からきているといった牽強附会の説をなしている。これは文字をまちがえている。梟首の梟という字は、もともと州県の県という字で、これは篆書の「首」の字を逆さまにしたものである。鳥の梟という字を使ったのは音が同じの字を借りただけである。これは文字上の証拠である。生物学上の証拠としては、フクロウはもっぱらスズメなどの小鳥を食うだけだということである。しかもその食いは、獲物を丸呑みにして、胃のなかで消化させたのち、毛や骨を団子にして吐き出すのである。クチバシでついでむという食いはしない。だから母親を食おうとおもったら、自分より大きいものの全体を丸呑みにしなければならない。これは無理な話である。かつて田舎に暮らしていた時分、ちっちゃなフクロウを籠に入れて飼っていた。当時、こいつがエサを皮や骨ごと丸呑みにするという習性を知らなかった。知っていたとしても、ネズミなどをつかまえることはできなかったらう。豚肉を買って食わせることしかできなかった。そのせいか脚気にかかって死んでしまった。これは自分の経験をふまえて書いているので、非常に確かなことである。

ここまではフクロウについてのデマを打ち消してみた。ここからはフクロウをホメてみよう。フクロウは掛け値なしの益鳥である。人類の友である。ドイツの博物学者によれば、フクロウが吐き出した七百六の毛の団子を調べたところ、ドブネズミ、ハツカネズミ、野ネズミ、コウモリの骨の残りが全部で二千五百二十五も検出された。ほかには小鳥の残骸が二十二だけであり、そのほとんどはスズメであった。ひとりの人間がネズミを二千五百匹もつかまえたとしたら、そりゃあもうネズミ捕りの名人である。黙々とこれやってくれるフクロウには感服すべきじゃないだろうか。都市に住んでいれば、フクロウを見かけるチャンスはめったにない。田舎に住んでいるひとにお

願いする。どうかフクロウを保護してほしい。それが益鳥であることを肝に銘じて、ただ危害をくわえないようにするだけでよい。

カバについて

カバ（河馬）はおよそ馴染みのある生きものではない。それを目にするのがないだけでなく、中国の過去の書物にもめったに出てこない。その名称はいかにも中国語らしく、不自然な感じはまったくないが、調べてみると「河のなかの馬」という意味の完全な外来語である。ただ解せないのは、いにしへのギリシア人が「馬」と名づけたことである。じっさいはイノシシの仲間であることは、その体型と蹄とを見ればわかる。

カバは高さが五尺、長さが一丈六尺もあり、ちっばけな尻尾までふくんで計算すると重さは約四トンにもなるらしい。サイやゾウにもひけをとらない大物である。世界中を見わたしても類を見ないほどの貫禄である。ところがカバもサイもゾウも生まれついで肉食で、植物しか食わない。こいつらが肉食だったら大変なことになるという説もある。

カバは水陸両棲の動物である。陸上にいるときは機敏とはいいがたく、走る速さは人間と同じくらいだが、いったん水中にはいけば、そこは自由の天地となる。カバの耳と鼻とは特別なつくりになっていて、開いたり閉じたりできるので水がはいらず、しかも頭のうえについている。目はでっぱっており、全身がすべて水中に没しても、目だけは水面に出る。おまけに川の底を走ることもできる。カバの食いものは水草で、しかも半端じゃない量を食う。胃の長さは約十一尺もあって、一石二三斗ほども詰めこめるという。

カバはすこぶる有用な動物である。アフリカ大陸の川では水草の育つのが非常にはやいため、しばしば流れをふさいでしまう。さいわいにもカバが水草を食ってくれるおかげで、川底の道をさらってくれるという効用がある。さらにカバの肉は食用になる。アフリカでカバを捕まえるときは、木をその大きな口のつかえ棒にして、縄で四本の脚を縛る。ちょうどイノシシを縛るときの要領である。またカバの皮はおそろしく分厚く、約二寸もある。馬を打つ鞭や人を責める杖をつくるのに使われる。必要な寸法に切り、乾燥させてから加工する。できあがったものは琥珀のように見える。カバの歯もまた象牙と同じくらい役に立つ。さきの小文（「犀」）で、サイの角、ゾウの牙、どちらも珍

奇なものだが、カバは見劣りするといったが、そうとばかりもいえない。ただ、サイの角やゾウの牙よりも手に入れにくいというだけである。その意味ではむしろ珍重すべきかもしれない。

カバは、ローマ帝国をのぞけば、ヨーロッパではあまり見かけない。イギリスのロンドン動物園は、一八五〇年になって、やっと生きたカバを一頭手に入れ、大きくなるまで育てたという。この一事をもってしても、その珍しさは想像するに余りある。昔の中国にはまったく存在しなかった。なにせ遠くアフリカから、はるばる運ばなければならないから。だから歴史的にもカバは存在しなかっただろうと見当をつけ、「犀」という小文でそのことに言及した。ところが、あとになってわかったのだが、それはまちがっていたようである。北京動物園の図絵に、水禽湖の北に「河馬館」と書いてあるので、カバが存在したことがわかった。どうやら二頭のカバがいたらしいが、さほど大きくはなかったそうである。いずれにせよ、上文に述べたところは、せいぜいカバについての大雑把な概観にすぎない。

詩人・黄公度

清朝末期の詩人のなかで、わたしが最も敬服するのは黄公度である。公度は、名が遵憲、広東は嘉應州のひとである。かつて戊戌政変に参加したこともあったようだが、かれの場合、政治の主張よりも文学の活動のほうが出色である。ところがここに問題がある。というのも、わたしは詩については門外漢なのである。わたしが敬服しているのは、かれの学問および見識である。わたしの黄公度観は、したがって「ものの価値に暗く、卑しいものを尊ぶ（積を買って珠を選す）」（『韓非子』外儲説）と皮肉られること必至である。

黄公度の著作には『日本国志』『人境廬詩草』『日本雑事詩』の三つがある。すべて刊本（刻本）がある。『日本国志』『日本雑事詩』は一見ありきたりのようであるが、じつは黄公度の面目が躍如としている。その理由はふたつ。ひとつは、かれは中国文化について造詣が深く、日本が中国文化をどのように継承したかということをも明晰に理解しており、またそのことに自身が興味津津であるということ。もうひとつは、かれは西洋の新しい学問にも通暁しており、あらゆることを革新すべきであるという道理をわきまえているということ。このふたつの特色をそなえていなければ、一個人の意見は偏向をまぬがれない。『日本雑事詩』定本

の序にはこう書いてある。

わたし知り合いの多くは伝統的な経史子集の学者で、それとなく諫める言い回し（微言諷刺）や溜息まじりの嘆き（咨嗟太息）がわたしの耳に充満していた。国にあつては大夫をみだりに誇らないことをみずからに課したが、新旧の同異に対する見解がいつい詩中に露呈してしまった。閱歴が日々深まり、見聞が日々広まるにつれて、窮まれば変じ、変ずれば通じ、通ずれば久しという道理を知悉するに至った。西洋のやり方を摂取し、古きを改めて新しくすることによって、卓然として自立できるだろうと信ずるようになった。それゆえ『日本国志』に書いた序論は、しばしば詩の意と乖離し、背馳する仕儀となった。

定本が刊行されたのは光緒戊戌（一八九八）であり、すでに初版から十九年になるので、かれの変法に対する見解は大いに改良進歩した。たとえば原本巻上の七十二の論詩にはこんな変化がうかがわれる。

幾人漢魏溯根源	漢魏の根源に遡る人はおらん
唐宋以還格尚存	唐宋以来の決まりが残つとる
難怪鴉林賈争市	道理で新羅の商人が競争する
白香山外数随園	白居易のあとと袁枚ってこと

この詩が定本ではつぎのように改められている。

豈独斯文有盛衰	盛衰があるのは斯文だけかな
傍行字正力横馳	横書きの文字が横行しておる
不知近日鴉林賈	新羅の商人はどうしてるんだ
誰費黄金更購詩	金で詩を買ったりするもんか

日本人は、漢詩の作り方さえ学ばば、中国人と唱和できる。中国の文人にとってうれしいことであるが、黄君はあっさりと打ち消して、いささかの未練もない。これは当時の中国にあつてはめずらしい態度である。

『人境廬詩草』十一巻という詩集の特色は、かれの「言いたいことを書く（我手写我口）」という主張を實行して、中国の新体詩の先駆けとなったということに存する。このこと以外にわたしに言えることはない。

以前、竹製の紙に緑の線を引いた抄本をもらったことがある。半頁が十三行で、真ん中の折目に「人境廬詩草」の五字が刻んである。題簽は『人境廬詩草』と

いう篆書の木版であり、黄君の手筆にかかる。その書は高さが二十三センチ、題簽は長さが二十二センチ、赤い蠟箋のうえに刷ってある。抄本は全四巻で、刊本と比べると内容はほぼ前六巻と同じだが、刊本では九十四首が削除された。削られたのは若書きの集外詩であるが、それでもなお収集に値する。ただ惜しむらくは、この抄本は今日失われた。そこには少なからざる好い詩があった。刊本には『人境廬雜詩』八首があるが、抄本にもともと十首あったうち、削除された第九、十首について、かつて抄録したことがあるけれども、その「人境廬」の故実でもある二首をここに引いておこう。

扶竹訪花柳	偶一過隣家	高芋如人立	疏藤当壁遮
絮談十年乱	苦問長官衙	春水池塘滿	時間閣閣蛙

無数楊花落	随波半化萍	未知春去处	先愛子規声
九曲欄回繞	三叉路送迎	猿鳴并鶴怨	慚对草堂靈

オオカミの故事

オオカミには、だれもみな反感をいだいている。有害な猛獣のなかでもオオカミがいちばん残忍であり、かつ卑怯でもあって、憎むに値する、と。朝鮮動乱のときの中国における対米運動（抗美援朝）の「米国オオカミを打倒する」というスローガンなど、まさに恰好の例である。

スウェーデン（瑞典）のスヴェン・ヘディン（斯文赫定）の『中央アジア旅行記』を読んだことがある。中央アジアにはオオカミがうじゃうじゃいて、地元でのオオカミ狩りの様子がすこぶる特別であるということが書いてある。一枚の挿絵があった。鎧のようなものを着せられた二頭の馬が、一輛の馬車をひいている。馬車には数人が乗っている。ひとりには短刀をもち、もうひとりには籐のツルでつくったワナをもっている。馬車はだだっぴろい曠野を駆けぬけている。馬車のまわりはオオカミだらけ。見ているだけでゾッとすくらしい黒山のようにむらがついている。オオカミが馬車に飛びかかってくると、それをワナにひっかけて上にひっぱりあげ、短刀をもったものが素早くその皮を剥ぐ。皮を剥がれたオオカミは、馬車から放り投げられる。オオカミの群れは皮なしのオオカミに奔り寄り、その肉をむさぼり食ってから、ふたたび馬車を追いかける。オオカミの群れならではの光景である。同類以外に凶悪な行動をとるだけでなく、仲間の肉でも

食らって憚らない。けっきょく人間には敵わないで、狩られてしまうのだが。

中国の物語にオオカミはあまり出てこない。たまに出てきても、ろくな話ではない。『聊齋志異』のなかに二篇見える。ひとつはこんな話である。あるひとが二頭のオオカミにでくわす。あわてて稲藁を積んだなかに隠れ、短刀をもって身を守る。一頭のオオカミが稲藁のまえにうずくまり、しばらく立ち去ろうとせず、居眠りのふりをしている。かれはスキに乗じてオオカミを殺す。振り向くと、もう一頭のオオカミがうしろから稲藁にもぐりこんでくる。前後から挟み撃ちにする予定だったらしい。すぐさま気づき、あっさり殺す。もうひとつはこんな話である。あるひとがオオカミにでくわし、木に登って難を避ける。オオカミの群れが集まってくる。首領のオオカミの指揮によって、木の根っこのほうから一頭づつ連なって登ってくる。はじめに四頭、それから二三頭、最後に首領がもうちょっとで届きそうなところまで登ってくる。そのひとはパニックになり、短刀で首領のオオカミの頭を斬る。首領が殺されると、ほかのオオカミは一斉に退散する。

ふたつの物語によると、オオカミの知恵もそこそこ捨てたもんでもないみたいだが、ほんとはこんなに賢くないそうである。じっさいは弱きをいじめ、強きへつらう(欺軟怕硬)というテイタラクらしい。

トラ、その他

中国では、古来、トラを百獣の王と称する。『戦国策』の「トラの威を假るキツネ」という故事のなかに、すでにその呼称が見える。のちに許慎も『説文解字』で「虎」という字を「山獣の君なり」と解説しているように、こういう呼び方は昔からあった。ところが、どういう風の吹きまわしか、この肩書をライオンにゆずることになった。「ライオンは虎や豹を食う」というウワサは西域の影響を受けたのである。さらに西洋文学がはいつてくると、そのなかでライオンが敬意をもって語られるので、次第にトラにかわってライオンが百獣の王と称されるようになった。正直に言って、これは不公平である。なるほどライオンもそこそこ偉いけれども、東洋伝統の言い伝えの真実性は別のところにあるのであって、ここはひとつ訂正しておかねばならない。

民間の故事、たとえば「トラばあさん(老虎外婆)」「トラびびり(老虎怕漏)」ではトラが重要な役割をに

なっており、これはライオンで代替できるものではない。これらはみな喜劇であって、トラが不運に見舞われるという物語である。まさに百獣の王であるトラがひどい目に遭うから笑えるのであって、これが「クマばあさん(熊外婆)」「オオカミびびり(狼怕漏)」では面白くもなんともない。

『水滸伝』では武松がトラを退治する。もっとも人口に膾炙した逸話である。トラ退治は至難のわざであって、およそ人間にできることではない。もちろん講釈師にも経験がないから、いい加減なことを語っている。第二十七回(百二十回本では第二十三回)ではこういつている。

だいたいトラが人をやっつけるのは、ひと打ち、ひと蹴り、ひと叩きの三手で、この三手をしくじると、その勢いの半ばは殺がれてしまうものなのである。

金聖嘆は大いに賛嘆し、「博識の才筆にかかるゆえ、さだめて妄言ではなからう。ただ裏づけがないだけだ」と評した。現在では、動物の習性が明らかになってきて、上記の記述が根拠のないデタラメだと証明されている。肉食動物が獲物をつかまえる場合、最初の一撃が勝負である。百回のうち一回もしくじることはない。もし万が一しくじったら、揺さぶったり、払ったりしないで、ふたたび最初からやりなおす。それでも失敗すれば、あっさり諦める。どっちみち獲物はたいてい素早く、いったん逃げられたら、もう追いつきようがないので、はなから追いかけたりしない。飛びかかって一撃食らわし、牙でノドか後頭部に噛みつき、頭をひと振りし、獲物を叩きつけ、その背骨を折る。もし凶体のかい大物なら、脚の筋を噛み切り、別のところに持って行ってから食う。トラは野牛を引きずって走れるくらいの怪力ではあるが、ある伝説がいうように獲物を背中に載せて運ぶわけではない。

トラはしょっちゅう人間を襲うわけではないが、母親のトラが子どものトラを育てていて食いものが足りないとき、あるいは歳のせいで獲物をつかまえる力がおとろえたとき、人間を襲うこともある。いったんその味を知ったら、村里の近隣をウロチョロしながら、人間や家畜を狙うようになる。

トラはライオンといっしょでネコ科に属しており、似たところがたくさんある。機嫌がよいときはネコと同じようにごろごろとノドを鳴らし、身体を人間の足にこすりつけるのが大好きである。ドイツのサーカ

スの猛獣使いの話によれば、よほど注意しないと押し倒されてしまうそうだ。怒ったときは吼えだせず、ネコのように低く唸る。そういうときは危ない。襲ってくる気だから。ネコの仲間はひどく陰気で、たいてい黙っている。ライオンだけは例外で、ときに吼える。

その声は大きく、恐ろしい。仏教に獅子吼という言葉があるが、うまい譬喩である。もっとも、敵を攻撃するさいには、やはり声は出さない。

(2015. 7.31 受理)